歴史館だより

財団法人最上義光歴史館 Vol.2 平成7年3月発行

最上義光所用　三十八間金覆輪筋兜

歴史館の一層の充実を期して

財団法人最上義光歴史館
理事長　板垣 啓二

理事長就任後、八か月余が経過いたしましたが、この間、歴史館の展示品や事業等に対して、市の内外を問わず多くの方々から温かい賛辞や貴重なご提言等をお寄せいただいております。最上義光歴史館に対する期待の大きさに、改めて職責の重さを痛感しているところであります。

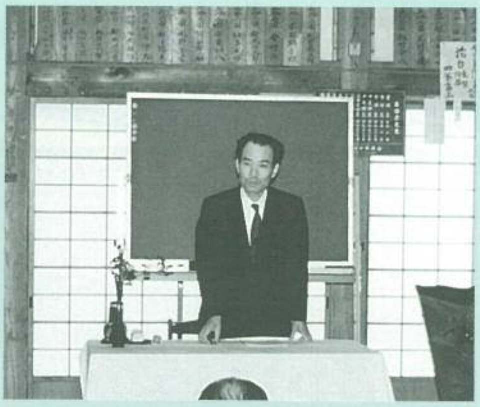
最上義光歴史館が開館したのは平成元年十二月でありますが、その後、庭園の築造や収蔵庫の増築等が行われ、一方では山形城二の丸東大手門の復元や地元商店会の尽力による大手門通りの改修などが進んで、霞城公園および当歴史館の周辺は、本市の文化ゾーンとして整備促進が図られております。さらに、山形市では、山形城の復元を念頭に置いた霞城公園整備計画に基づき、各種の調査・研究を行っており、昨年はレーダー探査や発掘調査によって本丸堀の遺構が確認され、長期展望に立った同計画の実現に向けて、また一歩前進したところであります。

このような状況を踏まえながら、当歴史館を周辺文化ゾーンの核となる施設として位置付け、その一層の充実を図るとともに、郷土発展の基礎を築いた最上義光公の業績をより多くの人々に理解して頂くため、優れた事業の展開等に努めるなど全力を注いでまいる所存でありますので、今後とも大きなご支援を賜りますよう心からお願い申し上げます。

農政家としての最上義光

山形大学教育学部教授　横山昭男

本稿は一九九四年十月十八日　山形市光禅寺で開催された「義光祭」での横山先生のご講話を、事務局で簡約したものです。



◆大開発時代と最上義光

室町時代の末から江戸時代の初めにかけての約一世紀は、全国的に人口の急激な増加が見られた。それは水田の大規模な開発と並行していた。この時代は、いわば大開発時代であり、最上義光はちょうどその時点における出羽国開発のリーダーであったといってよい。義光の業績を、農政という観点から見ることも意義があるだろう。

今回は、堰の開削を中心にお話したい。

◆山形の開発と五堰の開削

馬見ケ崎川の水を水田に引くのは、それなりの大事業であった。

笹堰・御殿堰・八ケ郷堰など五つの堰について、推測をまじえていうなら、中世にはそれぞれの集落の水利権ができており、義光のころさらに開削整備されたのだろう。馬見ケ崎川の水にたよるそれらの村は、江戸時代の初頭にはすでに成立していた。

しかし、城西地区の村々の大きな開発は、山形城の堀と城下町の拡張とともに、堰の整備によって進展したことは事実であろう。

山形の開発と馬見ケ崎川の水利の関係は、今後も研究していきたい問題だ。

◆庄内の開発

戦国末期までの庄内は、広大な原野が広がり、水利に恵まれた地域のみが水田として開かれ、集落も成立していたと考えられる。

慶長六年（一六〇一）、義光がこの地方を支配するにいたり、領国経営の一貫として開発を進めることとなった。

庄内南部を流れる赤川の治水事業は、慶長年間に義光によってなされ、それ以後流路がほぼ安定した。

鶴岡市を流れる青龍寺川は、赤川の分水であるが、この事業を成し遂げた結果、鶴岡市が水害をのがれることができるようになり、同時に平野南部の開発が進んだ。

因幡堰は、義光の時代に着工されている。たいへんな難工事だったらしく、完成したのは元禄（一七〇〇前後）ごろに下っているが、着眼は義光の功績としてよいだろう。

中川堰は、義光よりも後、元和（一六一五～二四）年間に開削されたもののようだが、庄内の美田を構想した義光の意思を継いだとみることができる。

◆最上義光と北楯大学

高名な北楯大堰は、義光の家臣北楯大学助利長が建言し、義光の指示を受けて慶長十七年に完成した。立谷沢川から平野の東部まで、総延長一〇キロメートルを越えるたいへんな難工事だったが、義光は庄内一円、由利郡からも人夫を動員して工事に従事させた。この堰のおかげで、現在の清川、狩川より西の原野が見事な穀倉地帯になった。新たな集落も数多くできるにいたった。

北楯利長は、この業績によって地域の農民からたいへんな尊崇をうけている。しかし、その背後に最上義光がいたことを忘れることはできないだろう。

この工事中に、義光が利長に宛てたという手紙がある。

「昼夜の別なくがんばっている様子、ご苦労なことだ。自分も行けばみんな喜んでくれるだろうが、行けないのが残念だ。清川、狩川の者たちは特に辛労のことと思う。みんなによろしく伝えてほしい。」

義光のあたたかい心情がにじんでいるようだ。

◆結び

最上義光の農業政策については、奨励作物、貢納などもふくめて、明らかにしたいことはたくさんある。今回は、その一端として水田開発の点を概観してみた。

（▲立川町教育委員会佐藤一視氏提供）

近世山形城下町の誕生

上山市立山元小学校教頭　高橋信敬

今の山形の街の原型は、最上義光が作った近世山形城下です。関ヶ原合戦後、最上義光は、最上・村山二郡のほか、新たに庄内三郡と由利郡を加増され、石高では全国第六位、表高五七万石、実収高百万石の大大名となりました。そして、その城下町は〝最上百万石城下〟といわれていました。

城下作りに三〇年

出羽国の覇者となった最上義光は、新封土にそれぞれ家臣を配し、論功行賞を行いました。慶長十年（一六〇五）前後は、「最上四十八館」の防衛陣を構え、最上義光の勢力が奥羽の雄藩として名実共に確立した時期です。

最上義光が山形城郭の経始や城下の町割にいつ着手したかは不明です。しかし、山形城の改築は、天正から文禄にかけて行われたと伝えられています。文禄元年（一五九二）に、義光が九州の名護屋に出陣していた留守中に、山形城の改築が行われていたことが「立石寺文書」でわかります。また、文禄二年に三の丸の濠を西から東へほり進めていたことが「伊達文書」にも見られます。寺院や神社の創建・移建年代から推定しますと天正、文禄、慶長年間にかけて、町割とともに寺社が配置されていったことがわかります。すなわち、近世山形城下の建設に、およそ三十年間かかったといえます。

山形城の縄張り

山形城は、本丸、二の丸、三の丸を同心円的に曲輪（郭）を重ねた輪郭式縄張りの土塁の城でした。平城の大きさとしては全国でも屈指です。

最上時代の本丸は、私の調査復元によれば、東西一五〇m、南北一六〇mでおよそ七千坪の広さでした。二の丸には五つの出入り門があり、東西三九六m、南北四二七mで、その面積は、五一八〇〇坪の広さであったといわれています。（『山形の歴史』）

三の丸には十一の出入り門がありました。二の丸と三の丸には五三四人、郭外には一三二六人の家臣の屋敷地がありました。広大な三の丸には、最上家の一族、重臣、譜代家臣などの屋敷がたくみに配置されていました。重臣の氏家左近之丞（成沢城主一七〇〇〇石）の屋敷は現在の県立中央病院と殖産銀行本店の西部の一二〇〇〇坪をしめていました。三の丸の堀と土塁は、明治維新までそのまま残りましたが、本丸と二の丸の堀と土塁は最上家改易後山形城主となった鳥居忠政によって大改築されたものです。

間口せまく奥行が長い

当時の山形城下では、町屋敷では間口五間あるいは四・五間で奥行三十間の地割が多くとられていました。それを「一軒前」と称していました。

今でも十日町、三日町、五日町などにその形態が残っています。すなわち一三五坪から一五〇坪の土地が分与され、街道沿いの商人町では、店、母屋、中庭と続き、その奥が蔵や菜園といった細長い屋敷地がその典型だったのです。

山形城下を羽州街道が通っていました。この街道に沿って、五日町、八日町、十日町、七日町、六日町、四日町があり、八日町の裏には二日町、七日町から仙台街道に通ずるところに三日町がありました。これは当時の市日商業の状況を示しています。

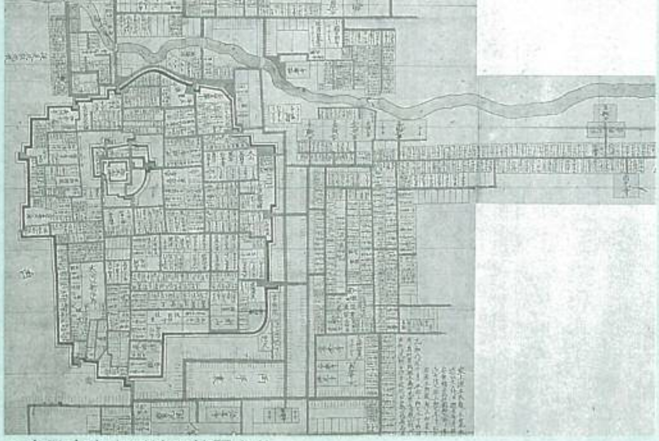
十日町と七日町の東の通りには、材木町、蠟燭町、銀町、塗師町、桶町、桧物町などの職人町がありました。また、馬見ケ崎川の北方にあった職人町の鍛冶町と銅町とともに人足役を免除された「御免町」でした。

元和時代の城下の町数は三十一ヶ町で屋鋪家数は二三一九軒半でした。武家と町人を合わせた人口は、三五〇〇〇人以上あったと推定できます。

多い丁字路とかぎ形路

山形城下の街路は、南北にそろえて作られました。これは馬見ケ崎川扇状地の等高線に沿っています。城下の南端にある上町は海抜一二〇mの所にありますが、羽州街道は扇状地面を次第に上り八日町の誓願寺角で直角で向きを変え北へ進みました。この八日町から六日町までの城下商業の中心となった町は、一四〇mから一五〇mまでの間の土地を斜めに横切る形で作られていました。そして今度は六日町角から次第に下り、城下の北端の銅町では一二〇mの土地になっています。南北の街路は経済上の幹線と考えらえて町割がなされていたようです。それに対して、東西の街路は、軍備、軍略上から丁字路やかぎ形路が数多く作られていました。最上時代の山形城下絵図により、筆者が調査したところでは、城郭内での丁字路は六十ケ所、かぎ形路が十八ケ所、城下では丁字路は百ケ所、かぎ形路は二二ケ所もありました。街路が見通されることを防ぎ、戦時において防禦しやすいように万全の工夫がなされていたことがうかがえます。

山形城下では寺院と神社の境内地が、この主要街路に沿って配置されていました。両所宮、円応寺、龍門寺、薬師堂、専称寺、法祥寺、諏訪神社、常念寺、誓願寺、宝光院、八幡宮などを拠点として、城下の縁辺、枢要な地点、城下の出入口付近にたくみに配置されていたことがわかります。



▲斎野家本山形城下絵図より

参加して

こども講座

山形城を探検して

若林　蘭（桜田小学校　五年）

わたしは、「山形城を探検しよう」という講座があることを先生にお聞きして、三年生のときに社会科見学で、ながめたことのある山形城をよく知りたいと思い、その講座に参加することにしました。

最上義光歴史館に着くと、初めに最上義光について、近藤先生に教えていただきました。代々のお殿様のこと、非げきのお姫様、駒姫のこと、山形城はかすみが城などともいわれていたこと、お城のいろいろな場所の名前などを勉強しました。

そして、いよいよ山形城の探検です。問題用紙をもらい、それを探検しながら解いていくのです。問題には「最上義光の像はどこに向かっているでしょう」や「最上家をあらわす家もんはどんな形でしょう」などがありました。

わたしの見てみたかった、北門の石垣の印は、十井⊖⊕W卍卜Σ口などがありました。かじょう公園には、何度か行ったけれど、全然知りませんでした。

探検を終えて、山形城の広さをしみじみ実感しました。それに、先生方の説明でお城の意味の深さもわかってきました。

桜の季節や、紅葉の季節に、きれいなお城だなぁと思っていた、そのお城には、いろいろな人の喜びや悲しみがあることがわかりました。特に、駒姫のお話を聞いた時には、お姫様というのは、きれいな着物を着て、幸せそうに見えるのに、本当は、農民たちよりもかわいそうな運命の時もあるということがわかりました。

これから、わたしがやりたいと思っていることは、北門の石垣の印のなぞを解くことです。図書室で、いろいろなお城の本を借りてきて、自分なりに調べてみたいと思います。

来年も「こども講座・山形の歴史」に参加してみたいと思います。

歴史探訪の旅

兵(つわもの)どもが夢の跡

丸子　邦夫（東原町　予備校講師）

「最上義光歴史館」主催の「歴史探訪の旅」の第一日目は城巡りであった。

最初に訪れた横手城は、国道十三号線からも望まれ、その存在は承知していたが、実際行って見るのは初めてであった。急なうえに狭い坂道を一行を乗せてバスがあえぎながら登ると、そこは横手公園で、その中に天守閣がそびえ建っていた。この城は幕末の戊辰戦争で仙台・庄内軍による砲火のため炎上したという、山形県とは因縁浅からぬ城である。昭和四十年に再建され、中は郷土資料館として利用されている。規模は小さいが、姿のいい城である。日曜日なので、坂道の途中の保育園では父母を交えた運動会をやっていたが、山上の城まではその歓声は届かず、あたりは静寂であった。少し荒れ気味の広場にほとんど人かげはなく、松の老木だけが往時をしのばせていた。

横手から引き返す途中、バスの中から小高い丘の山にある湯沢城趾を望む。この城も横手城と同じく小野寺氏の築城によるものだが、十七世紀の始めに廃城になっている。

次いで、湯沢から国道三九八号線に入り、稲庭城跡に建つ今昔館を訪れる。「稲庭うどん」では知られた町だが、ここにこんな立派な建物があるとは知らなかった。二の丸跡に平成五年に物産館としてオープンしたものだそうだ。たしかに城の跡の形はしているが、館内は全く現代風なのだ。ここは急峻な山城であったようで、今はスロープカーに乗って登るようになっている。それがカゴ型に作られているのも、城を意識してのことだろう。頂上の狭い台地に立つ三層の天守閣、その四階の展望台からは秋の黄金色の田んぼと点在する集落が眼下に一望でき、それに続く山なみの向こうはもう山形県だという。ここでも幾多の戦乱があって功名手柄を夢見た「兵どもが夢の跡」なのだと思うと感慨はひとしおであった。見事な老松に吹く風はさわやかであった。

歴史の談話室

味わいの深い花見に…

舟山　智恵（城西町　主婦）

　最上義光歴史館ができてから、山形に住んでいるものとして一度は訪れて見聞しなければ、という思いを常に持ちながらも、入る機会と気持ちのゆとりがなく、建物を横目で見ながら素通りしていた。というのは、これまで仕事上、転勤が多く、県内外の勤務地と山形との往復で、歴史館を覗く時間の余裕がなかったのである。

　昨年夫の定年を迎えて、ようやく自宅に落ち着くことができた。長年の緊張感が解け、時間という空白が身の周りに漂うのを感じて、しばらく何とも気持ちのいい刻を過ごした。「山形・その歴史と最上家」の講話と談話会があると広報で知ったのは、そんな心のゆとりを持ったときだ。山形を知る機会だと迷わず参加したのだった。

　週に一回二ヶ月の間、解りやすく解説して下さった片桐局長さんと、揚妻さん、そして集まった皆さんとの楽しい話し合いの中から、歴史に弱い私でしたが、いろんなことを知ることができた。

　――出羽の戦国時代を統括した義光の活躍。その後の山形城を中心にした町造り、そして庄内平野を拓き、産業、経済の発展に力を入れた。そんな義光の大きな夢の下地のもとに現在の山形があることを――。

　山形のことを何も知らずに居たこれまで、どこか気持ちが不安定であったが、その成り立ちを知ってから、地に足が着いて、確かな山形の住人になったような感じがする。

　霞城公園は私の通り道だ。公園内は勿論、二の丸のお濠の桜並木は素晴らしい。花の季節、今まではただ花の美しさを愛でるだけの散策にすぎなかったが、これからは、揺れる桜の枝葉の間に、花びらが舞う水面に、最上義光の波乱に満ちた重い生き方を垣間見て、味わいの深い花見になることだろう。

歴史講演会

三好京三先生の講演を聴いて

長谷部　茂（籠田　飲食店経営）

　白鳥十郎や長男義康の事件などだけを捉えて、義光公の人物を語られる機会が多かった　三好先生は、その点について、戦国武将は領国の統率のため止むを得ず成敗した。それは伊達政宗公も他の武将たちも同じような事実があり、義光公だけが特に非情であったとは言えないとお話になりました。

　五十七万石の山形城とその城下町を築いた義光公が、テレビや小説などで、悪い人になっているのは、山形人として愉快なことではありません。

　義光公は斯波兼頼公の築かれた城を、文禄年間に大拡張され、城郭の外週が六キロメートルを越える大城塞を構築されました。

　そして職人の税を減免して職人町をつくり、流通経済を促進するため、遠く近江や伊勢から商人を招いております。

　また農民のためには堰を建設しております。いわゆる名君としての事績をきちっと残しておられます。

　そして出羽百万石とまで言われる繁栄を、山形にもたらしました。

　三好先生は、義光公の生涯最大の危機は、慶長五年の関ヶ原の戦いのときであったとお話をされました。

　江戸を攻めると思った上杉軍が、最上領に侵入して来ました。総大将は直江兼続でありまして、最上軍のおよそ三倍の二万五千の軍勢を引き連れて、狐越街道を越えて押し寄せて参りました。

　一挙に須川を越えて山形城も危ないかという状況でしたが、その前に畑谷城の江口五兵衛光清以下三百は撤退命令も聞かず全員玉砕して最上武士の意地を示しました。続いて長谷堂城も志村伊豆守高治以下五百が勇猛果敢に闘って十四日間も抵抗しました。その結果上杉軍は須川さえ越えられませんでした。

　関ヶ原の本戦が一日で終結したのとくらべるとこれは凄いことだと思います。

　ここに義光公とその部将たちの信頼の絆の強さを感じます。またこれによって義光公のよき指導者としての姿が浮かび上がってきます――。

　このたびの講演会は遊学館が満席となり、市民の方々の、歴史と義光公への関心の深さをあらためて感じました。ありがとうございました。

ふるさとの城と館

山形県中世城館趾調査員
茨木光裕

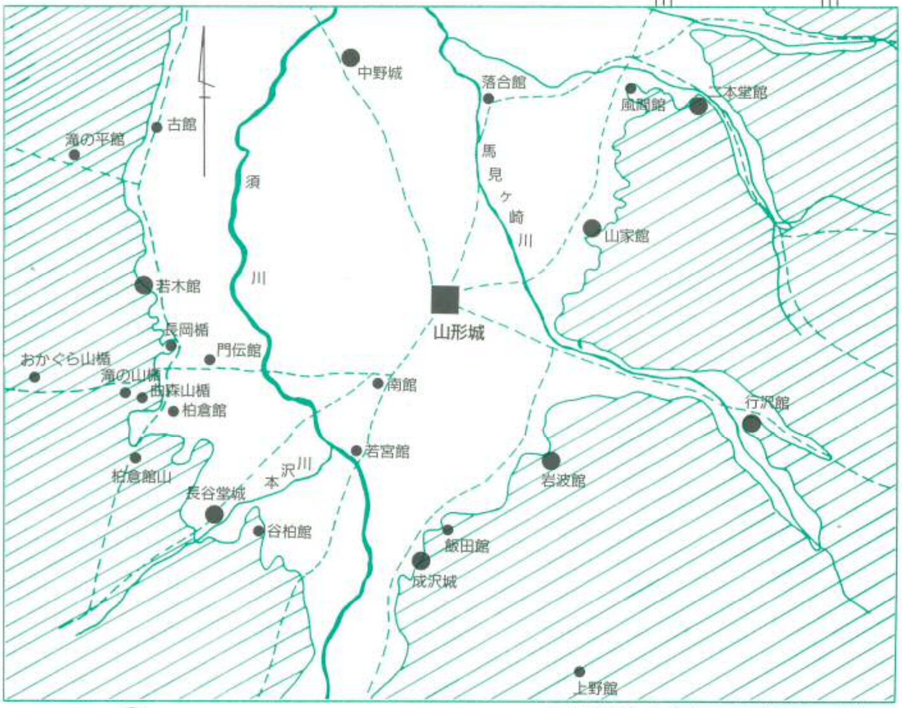
現在山形県全域で中世城館跡の調査が行われています。今年・来年度は、その締め括りの時期で、これまで調査してきた、それぞれの城館跡について、地域ごとにまとめて、報告書として発刊する予定で仕事が進んでいます。山形市内には、今回の調査で57ヶ所の城館跡が確認されました。一概に中世城館跡といっても、平地にあって現在ではほとんど形の残っていないものから、山の中にあって雑木や藪におおわれ、調査するのも困難なものなどいろいろで、調査をするのも大変な労力と苦労が伴います。特に、山城などの場合は、早春の木々のまだ芽吹かない時や、晩秋の雪の降る直前などに調査しないと、また次の時期まで待たねばなりません。それも、熊の出没を気にしながら、蛇におびえ、蜂の来襲に気をくばりながらと、まさに、完全武装の気構えでとりかかる必要があります。

山形にある城館跡の分布をみると、南館や中野城などのように全くの平地にあるものや、長谷堂城や天童市の舞鶴山にある天童城などのように独立丘陵に築造された例、成沢城や岩波館、若木館などのように盆地の縁で平地に張り出した尾根の突端にあるもの、あるいは、上野館や山辺町の畑谷城のように全くの山中の高まりに築かれた場合など、さまざまな状況があります。さらには、現在、見られる城跡の様子は、城が廃絶された一番最後の段階にあたるわけで、築城された時から幾たびと改修が行われたと考えられます。従って、いつ頃、誰によって築城されたのかということも大変重要な問題になってきます。また、他領との位置関係や交通路の状況などによって、一つの城館跡の持つ歴史的な性格や背景もそれぞれに違っているわけで、かなり複雑な様子を呈しています。テレビドラマで、刑事が事件現場に幾度となく足を運ぶように、城跡の調査も幾度となく現地に出掛け、足と汗で稼ぐとやっと築城した人々の意図が見えてくるような気がします。

中世城館跡の調査に行って、地元の人にいろいろ尋ねると、昔、あそこには、城があったというが今では、何も残っていないよとよく言われます。城跡というと、石垣と天守に象徴されるような近世の城のイメージがあり、雑木や藪に覆われた城山には、当時を語るようなものは何も残っていないと思うのが当然かも知れません。しかし、中世の城は、土塁や空堀、曲輪などを地形に応じ、防禦を最重点に考えながら山を削り、土を掘り、盛ったりして築いた土の城なのです。そして、平時は山麓部に居を構え、有事の際には城に詰めて戦うという性格のものであったようです。たとえば、山形市の東郊、二口街道と山寺街道が分岐する風間地区の丘陵突端に風間館があります。現在、採掘によって山が削られ、ほとんど何も残っていないのですが、街道に面した山麓には、字切図をみると新宿・裏門・内城などという地名が残り、水路によって区画された屋敷跡がわかります。山上にある城と、麓に館主の居館があり、それを中心として小城下のようなまとまった集落があったことがわかります。成沢城や長谷堂城、若木館、山家館なども規模の大小はあれ、同じような様子であったと思われます。

最上義光は、天正十二年に天童城を落とし、山形盆地一円に覇権を確立し、家臣を各地の要衝に配置して、山形城を中心とする防衛ネットワークを張り巡らしました。山形城下から各地へ至る街道の拠点にある城は、その街道をおさえ、他領へにらみをきかせる重要な役割をもっていたのです。山辺町の畑谷城などは、まさに他領と接する境目の城であったのです。長谷堂城などは置賜から侵攻してくる上杉勢に対する、防衛拠点で、麓から攻め上がってくる敵兵に対し、常に上から矢を放てるように曲輪が配置されています。

山城を歩いてみると、尾根筋を堀切によって分断し、主郭を中心として、空堀や曲輪を配置し、横の移動を妨げる縦堀を設けている場合もあります。それらの城館跡も、最上氏の改易によって廃絶し、次第に木々が繁り、藪に覆われてしまったのです。



▲山形城を中心とする城館跡の分布図

本沢に生まれて、生きて

寒河江　勝子

仲秋の空　寒き夜に
百万の敵　むかえつつ
長谷堂城を　守りたる
燃ゆる祖先の　魂を
戦のにわに　今たてる
我等の意気よ　天を突け

　これは、わが本沢地区の応援歌である。小学生が運動会で歌うのはもちろんのこと、本沢の人たちは、地区あげて事を成すときにこれを歌う。すると、意気が合い高揚する。祖先がどのように戦ったかの詳細は知らないのに燃えてくる。これを本沢人の血と言えないだろうか。

　さて、専門的な歴史は、郷土史研究会、他の方におまかせすることにして、城山やその周辺にまつわる、私の思い出のいくつかを書いてみたいと思う。

　長谷堂地区の人々の初詣は、城山の鐘つきに始まる。私たち子どもたちも例外ではない。「ゴーン。」と一つき。次、そこそこに観音様に手を合わせ、一気に駆け下り、すぐ向かいの春日様に駆け上がる。

　観音様が、最上十二番札所の観音であり、春日様が、長谷堂城趾に建てられた神社であることを知ったのは、後々のことである。

　長谷堂の入り口、出倉に生まれ育ち、男の子にまじって遊び歩いた私にとって、城山は、四季に応じた遊びが出来るすばらしい遊園地であった。

　城山の東側中腹、内町からゆるやかな石だんを少し登った所に、「おあまさま」があった。尼寺の事を、美しく品のよい庵主を含めて、村の人はそうよんで親しんだようである。

　そこでの旧正月の「だんごひろい」のスリリングは、忘れられない思い出の一つである。

　庵主さまが他界された後、寺は空寺となっていたようだが、今は改築され、阿弥陀仏が安置されて、地区民の信仰を集めている。

　話は前後するが、おあまさまについて、つい最近地区の有識者から聞いたことによるとこうである。「おあまさま」の正式名は「慈眼庵」といい、長谷堂城主の菩提寺・清源寺の末寺だという。清源寺の方丈が他界した後、未亡人となった奥様が移り住む庵として建てられた。扶持も与えられ、清源寺の壇徒衆が講中をつくり維持して来たとのことである。

　今にして「おあまさま」でだんごひろいをした後、清源寺にまで足をのばし、だんごをいただいたことを思い合わせると「そうだったのか。」と、何となく納得出来なくもない。

　清源寺といえば最上義光歴史館に展覧されている「すすき野図屏風」は、同寺所蔵の品とお聞きしているが……。また、本沢郷土史によれば、清源寺本堂は文政六年（一八二三）に上棟され、その設計と須弥壇及び蛙股の彫刻は、郷土の名工粟野音松作と伝えられている。

　八幡崎口から登った所に建つお八幡様から毎日、なり響いて来る太鼓の音も忘れられない。八幡様には、兵士の武運を祈りに参ったものだ。あの十二月八日を期し、友と語らって集団で毎日参詣した。幾日続いたかは覚えていないが、軍国少女だったのだな－。教育の力（おそろしさ）をしみじみ思う。

　お八幡様では、今は、交通安全祈願の行事が行われている。

　冬の寒い夜、ふと「ボーホーンホンホン」のホラの音を聞いたような錯覚を起こすことがある。お観音様の別当、長光院の長谷法印様の吹くホラ貝の音である。寒行として、厳冬の夜半、お経を誦しながら村を廻り、辻々で、吹きならす音。幼い私は、ただただおっかなかったが、村人には、安堵の音色だったのではなかろうか。

　本沢農協の購買部に行くと、米の価格表のいちばん上に「お手作米」の品名が見られる。「本沢でとれた米ということだな。」と、私はすぐわかった。「お手作」は八幡崎から少し下がったあたりの地名で、その由来は、昔、長谷堂城主がお手植えされる田があったところだから、との言い伝えがあり、私の実家の田もお手作にあったから。

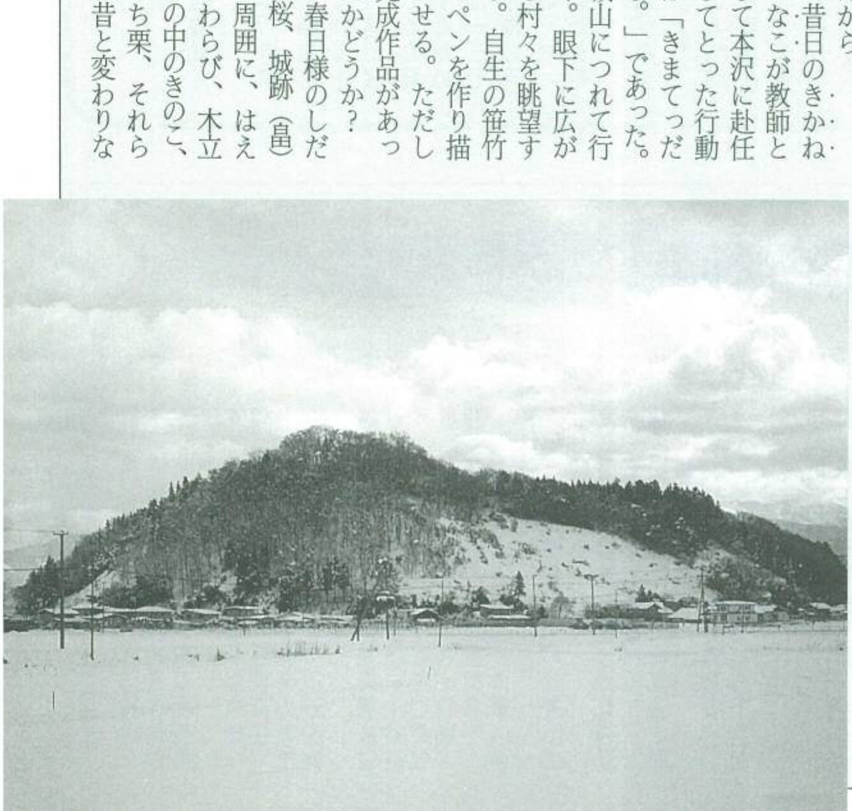
　昔日のきかねへなこが教師として本沢に赴任してとった行動は「きまてっだな。」であった。城山につれて行く。眼下に広がる村々を眺望する。自生の笹竹でペンを作り描かせる。ただし完成作品があったかどうか？

　春日様のしだれ桜、城跡（畠）の周囲に、はえるわらび、木立ちの中のきのこ、おち栗、それらは昔と変わりなかった。

　平成七年二月発行の公報「もとさわ」にのっている、遠藤公民館長の記事の抜粋で、しめくくりとしたい。

　「長谷堂城趾を史跡公園として整備するについては往時の姿を偲ぶことができる山城の遺構をなるべく壊さずに大切に保存することに努力、歴史的文化の薫る遺産に触れながら学習できるように整備されるようだ。（中略）昔を偲びながら城趾公園を散策する日も近い。」

（元中学校教員）



長谷堂城趾・城山

来年度の計画

最上義光生誕四五〇年をまえに

義光公が生まれたのは、天文十五（一五四六）年、来年は四五〇年にあたります。公は、巨大な山形城を築き、城下町をつくり、山形を出羽国の政治の中心地にし、商工業がさかんな町につくりあげました。

また、庄内原野を広大な美田にした最初の人物でもあります。

こういう事実をもっと広く、より多くの人々に知ってもらいたい……これを基本として事業をすすめてまいります。

「山形と最上家の歴史」をいっそう親しみやすく

市民の皆様や市外県外から山形をおとずれるたくさんのお客さまに、より親しまれるような展示と解説を工夫していきます。

小中学校のこどもたちからも、理解してもらえるよう、いろんなアイディアをいただき、検討をかさねて実施していきます。

特別展「日本刀の美」（仮称）

「武士の魂」「鋼鉄の芸術」といわれる日本刀は、どんなふうにきたえられ、つくり上げられるのか。現代日本のトップクラスの刀匠で、昨年度「山形市民文化賞」をうけられた上林恒平氏のご協力をいただいて、五月開催の予定です。

義光公の人間像と業績を明らかに

最上家が、近江（滋賀県）に移されたために、義光公のすぐれた人間像や業績もあいまいなままにされているところがあります。

戦いがつよいだけの、単なる武将でなく、文化芸術についても高い教養をもった人物だった……そういう面についてもさらに理解していただくために、研究者皆さまのご協力を得て、講演会や歴史講座などを開催します。

特別展「山形の城と館」（仮称）

戦国時代から最上義光の時代にかけては、山形の各地に城や館がありました。

むかしはどんな様子だったのか、どのような戦いがあったのか、今はどんなふうになっているのか。

山形県城廓研究会の成果をも大幅にお借りして展示し、ふるさと戦国時代をしのんでいただこうという構想です。

十月開催の予定です。

★「歴史探訪」「こども講座」も、例年どおりに開催します。その都度「広報やまがた」などでお知らせしますので、どうぞご参加ください。

新寄託資料

天文十三年墨書銘 経櫃（きょうびつ）一合

山形市岩波石行寺蔵

石行寺には、山形県有形文化財に指定されている十四世紀の写経一一四巻が蔵されている。寄託された経櫃は、それを保管するために、写経が完成した一三七五年から約一七〇年後の天文十三年（一五四四）に、あらためて新調されたものである。

この年は最上義光が生まれる二年前にあたっており、山形市にのこっている当時の木製品として大変貴重な資料である。その後、巻き物だったお経が今の折り本の形に作りなおされたため、サイズが合わなくなり、経櫃としては使われずに保存されてきた。

平成6年度のあゆみ

- 4・26～5・29 企画展「郷目右京進貞繁」
- 5・31 第1回 理事・評議員会
- 7・1 今野和子前事務局長の後任として、片桐繁雄事務局長が着任
- 7・4 スワンヒル市留学生来館
- 7・13 第2回 理事・評議員会
  佐藤幸次郎前理事長の後任として、板垣啓二山形市助役が就任
- 7・24 市政105周年記念無料開放日
- 8・11 「平家物語図屏風」（十日町長谷川家より寄贈）展観
- 9・11～12 歴史探訪会（湯沢・稲庭・花山方面・参加者33名）
- 10・1～30 企画展 みちのくの華「伊達政宗」
- 10・2 本館顧問最上家47代最上公義氏夫妻来館
- 10・8 こども講座「やまがたの歴史」（参加児童24名）
- 10・18 義光祭（最上義光382回忌）於光禅寺
- 11・3 文化の日 無料開放日
- 12・7～1・25 「歴史の談話室・やまがた」（水曜日午後延6回）（参加者91名）
- 12・16 第1回運営懇談会
- 1・25 第3回理事会
- 1・28～2・25 歴史講座「戦国武将の手紙を読む」 講師 武田喜八郎氏（隔週土曜日午後）（参加者34名）
- 2・14 山形駅前地下道に案内広告取り付け
- 2・18 歴史講演会「最上義光とその周辺」 講師 作家三好京三氏（聴講者380名）
- 2・21 子ども向けリーフレット完成
- 3・25 「歴史館だより」2号発行
- 3・28 第4回理事会・第3回評議員会

ご利用について

- 開館時間 午前9：00から午後4：30
- 入館料 一般 大人300円 高校生200円 小・中学生100円
  団体 大人240円 高校生160円 小・中学生80円
- 休館日 月曜日（国民の祝日と重なる場合はその翌日）／12月29日から1月3日
- 交通 JR山形駅より徒歩15分 大手町バス停留所より徒歩1分

山形市大手町1-53
TEL 0236-25-7101
FAX 0236-25-7102